



とっておきの一枚!

テレビの正月番組を収録中の恒子 昭和32年(1957)1月2日

大田区立熊谷恒子記念館版 記念館ノート

第2号

発行：2018年3月6日
編集：大田区立熊谷恒子記念館

館のトピック

◆熊谷恒子の筆

熊谷恒子記念館では、恒子の書齋が生前のままに残されています。その書齋の隅には、文房四宝をはじめとした恒子が使用していた身の回りの小道具を展示しています。来館者の興味を一番ひく道具は、かな書家・熊谷恒子を使用した筆です。書道用品の老舗である鳩居堂東京支店支配人を夫に持った恒子は、良質でかなが美しく書ける筆を使用していたのではないかと思う方も多いようです。筆についての恒子の記事を以下にご紹介いたします。

料紙の性質に依り、筆との関係を研究して、其場合々、に、筆を代へます事も御座いますが、大体左の通りであります。

1. 御愛用の筆銘 小さい仮名たとへば、巻、帖、色紙には純狸面相、尾上先生(尾上紫舟)選、青水無月、吉澤先生の、ははき木、など。

半切の位の仮名には、岩田先生選、鶴臯清賞、これで書譜などの草書も、お稽古します。

折手本の大きさの仮名には、岡山先生(岡山高蔭)選、高蔭用筆を用ひます。

2. 筆舗(筆を購入している店舗) 鳩居堂

3. 形体、性質(硬軟) 仮名を書きますにも真名を書きますにも硬い方を選びます。

(筆の好み 『書道』 第四巻第五号 泰東書道院出版部 昭和十年五月発行 六十三頁)

※愛用の筆銘は、昭和十年(一九三五)当時のものです。

恒子は「書家が筆の手入れをまめにすることは、一つのたしなみ」として、筆を大切にし、禿げてしまった筆を捨てられず、庭に筆塚まで作りました。当記念館にて恒子の書を大切に想う心を感じ取っていただければと思います。

平成30年度の予定

○かなの美展「やまとうたの風趣」

4月28日(土)～8月26日(日)

展示解説：5月4日(祝・金)、5月26日(土)、6月23日(土)、7月28日(土)、8月25日(土)

○かなの美展「近代短歌とかな(仮)」

9月8日(土)～12月9日(日)

展示解説：9月15日(土)、10月27日(土)、11月24日(土)

○かなの美展「平安古筆にならう(仮)」

12月22日(土)～平成31年4月14日(日)

展示解説：1月26日(土)、2月23日(土)、3月23日(土)

※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

《所在地》

大田区立熊谷恒子記念館

〒143-0025 大田区南馬込4-5-15

TEL 03-3773-0123

URL <http://www.ota-bunka.or.jp/kumagai>

《入館案内》

●開館時間 午前9時～午後4時30分まで
※入館は午後4時まで

●入館料 大人 100円、小中学生 50円
※65歳以上(要証明)、6歳未満は無料

●休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始、臨時休館

《土佐日記（初巻）》と藤原行成

大田区立熊谷恒子記念館担当学芸員 荻野 祐子

はじめに

熊谷恒子（一八九三～一九八六）は、昭和期に女流かな書の第一人者として活躍した人物である。昭和八年（一九三三）四十歳から昭和六十一年（一九八六）九十三歳で亡くなるまで、書家として活躍した長い年月の間に生み出された恒子の作品の多く（八十点以上）が、大田区南馬込にある大田区立熊谷恒子記念館の所蔵作品として残されている。今回は、当記念館の所蔵作品中《土佐日記（初巻）》に注目してみたい。

1. 熊谷恒子と藤原行成（九七二～一〇二七）

恒子は、昭和八年（一九三三）の第四回泰東書道院展にて書壇におけるかなの最高賞として当時知られていた東京日日新聞社・大阪毎日新聞社賞を受賞した。この受賞を契機に恒子は、書道家として書壇で活躍し始める。同展受賞作である《土佐日記（初巻）》は、紀貫之の日記文学『土佐日記』の冒頭部分「を」とこもすといふ日記といふものを」という有名なくだりを書いた作品である。巻子に小字で書かれた恒子のかなは、粘りがあって抑揚のある優美な線を持ち、気品を漂わせている。本作は、恒子の前期（一九三三～一九四五）作品の典型的な書風であり、平安朝のかなの規範である藤原行成を倣った字で書かれている。藤原行成は、平安三蹟（平安時代の能筆家三人）の一人と呼ばれ、他二人（小野道風と藤原佐理）より後の時代を生き、平安朝のかなである上代様を完成させた人物とされている。《升色紙》（十一世紀頃）や《粘葉本和漢朗詠集》（十一世紀頃）など、行成の筆とされた書は、平安古筆の名品として三の丸尚蔵館や五島美術館に所蔵されている。だが、現在では伝承筆者名でしかなく、実際は異なる筆者であるということが分かっている。そのため、行成と名の付く書は同じ様式美ではあるものの、細部の特徴が異なっている。本作品は、行成の古筆名品の内、当時恒子がよく倣っていた《関戸本古今集》（十一世紀頃）の特性を活かした書風となっている。では、なぜ恒子は昭和の時代に藤原行成という上代様を倣ったかなを書いていたのかを以下に説明したい。

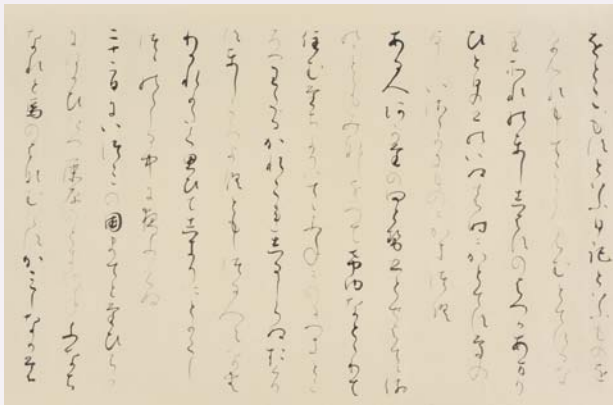
明治二十三年（一八九〇）、難波津会という宮内省御歌所の初代所長を發起人とした古筆研究会が結成された。平安古筆の調査研

究を目的としたこの会において宮内省の御物や華族が秘蔵する貴重な名品が披露され、会に出席した人々を魅了した。会自体は短命であったが、上代様の研究熱は、書家の間で高まり続け、大正・昭和の書壇においてかな書の様式美は上代様が主流となった。そのため、かなの美の頂点に行成のかながあった。どんな田舎のかな書家も行成のかなを手本としていたという話が残るほど、恒子が書を本格的に習いはじめる昭和初期にあつては、行成の筆は規範となっていた。恒子は、当然のように行成の筆を倣った。始めに《粘葉本和漢朗詠集》、次に《関戸本古今集》。恒子は、藤原行成の様式美を会得した。

また、恒子の嫁ぎ先である熊谷家は、書道用品の老舗・鳩居堂を経営する一族（夫は、鳩居堂東京支店支配人の熊谷幸四郎）である。その鳩居堂が所有する国宝《三宝感応要録紙背かな消息》（十一世紀頃）という名品は、藤原行成が伝承筆者であった。恒子が、実物を観る機会があつたかどうかは、資料等で確認できていないが、書壇の時流だけでなく、行成のかなは恒子個人にとつても身近なものであつたことが推測される。

2. 二人の師・尾上紫舟（一八七六～一九五七）・岡山高隆（一八六六～一九四五）と藤原行成

先に述べた難波津会で披露される御物に魅了され、古筆の研究と蒐集に務めたかな書家・大口周魚（一八六四～一九二〇）に師事した書家・尾上紫舟は、大正十二年（一九二三）『平安朝時代の草仮名の研究』という学位論文を帝國大学に提出し、上代様を規範としたかなの復興を確かなものとした。書を初めて



《土佐日記（初巻）》 1933年

学術的に体系化したその論文によって、尾上は、国文学者として書壇におけるかなの権威となった。尾上は、書家としても、藤原行成筆《粘葉本和漢朗詠集》を徹底的に学び、ほっそりとした気品の高い小さく美しいかなを書き、当時の書壇において「今行成（現代を生きる藤原行成）」と呼ばれたほどの書き手であった。昭和五年（一九三〇）、恒子はかなを本格的に習うために、尾上紫舟の元へ通うようになる。尾上の平安古筆の名品のように気品高く、細く、優美なかなに恒子も魅了されたのだろう。恒子は尾上がかなの美の規範とした《粘葉本和漢朗詠集》を徹底的に学んだ。だが、一年後の昭和六年（一九三一）に恒子はかなの原型である晋・唐の時代の漢字を学ぶことを希望し、尾上の許しを得て、岡山高隆の門下生となった。尾上は、漢字を書くとかかなの線が力強くなり気品がなくなるとして、門下生に漢字を教えるなかつたのだ。

岡山は、漢字書を恒川樵谷と巖谷一八に学んだ書家であったが、平安古筆の名品に出会い、かなに開眼した書家であった。平安古筆に魅せられた二人のかな書家であった尾上と岡山だが、かな書に対する考え方は水と油ほど異なるものであった。尾上は、行成の《粘葉本和漢朗詠集》そのままの抑揚のない細くなよやかな線こそが気品高いかなの美であり、高級芸術であるとした。だが、岡山は、行成をはじめとする平安朝の優美さに現代性としての勇壯さを兼ね備える抑揚と筆力のある線のかなを現代のかなとして目指した。そして、岡山は筆力のあるかなを書くためには、晋・唐時代の漢字を学ぶべきとした。岡山は、恒子に懐素や王羲之などの晋・唐の時代の漢字を教えた。当時、書壇におけるかなの権威であった尾上と、尾上に対して反骨心を持った岡山は、行成のかなや平安古筆を巡って書道雑誌などで応酬し合っていた。

《土佐日記（初巻）》や前期作品において、恒子は抑揚と筆力のあるかなの線を使用している。それは、尾上の元で平安朝の優美なかなの線を学び、岡山の元で平安朝の優美さに筆力を兼ね備えた線を目指したということの意味する。恒子は、当時のかなの規範《粘葉本和漢朗詠集》を超えて自身のかなを模索するために、岡山の元で漢字を学ぼうとしたのではないだろうか。

主要参考文献

- ・『フリー文現代の巨匠熊谷恒子』『墨』四七号、芸術新聞社、一九八四年三月一日
- ・『かな美への挑戦』福井淳哉『日本書道文化の伝統と継承』仮名美への挑戦』求龍堂、二〇一六年十月
- ・岡山高隆「高隆仮名帖解説」『高隆仮名帖』雄山閣、一九三〇年八月
- ・岡山高隆「仮名の過去、現在、未来―時代にふさはしき書体を生め」『書道』第一巻、雄山閣、一九三二年二月
- ・尾上八郎「平安朝の時代精神と草仮名」『書道』第三巻第一号、雄山閣、一九三四年